

ニーチェを読むヴァレリー

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-04-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安永, 愛 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00024899

ニーチェを読むヴァレリー

安 永 愛

はじめに

ポール・ヴァレリー（1871-1945）は、長年にわたり、ニーチェの奇妙な読者であり続けた。生前、ニーチェについての纏まった論考を発表したわけではなかったが、ヴァレリーは生涯の折ふしに、ニーチェに触れ、またニーチェの発想を発条として、魅惑と嫌悪との間で引き裂かれながら言葉を紡いでいるのである。

ニーチェに関する文章は、ヴァレリーが青年期から死の直前まで書き続けた、思考の訓練とその記録である『カイエ』の中に散見される。ヴァレリーはドイツ語を解さなかったので、ニーチェの著作をフランス語訳で読んだのであるが、ニーチェの著作の仏訳の多くを担ったアンリ・アルベール（1869-1921）が、ヴァレリーが初期の詩を寄せた雑誌『サントール』の編集長であったという事情もあり、アルベールからニーチェ訳の恵贈に与り、そのたび謝辞を書簡で送っている。それは「ニーチェに関する四つの書簡」としてまとめられ、ヴァレリーの生前に雑誌掲載されている。また、『イタリアにおけるニーチェ』（1929）の著者であるギ・ド・ボンタレスからの献本への謝辞をやはり書簡に認めている。さらに、1908年から1909年にかけてヴァレリーはアルベール訳でニーチェの著作を読み直し、論考の準備として「ニーチェに関する覚書」を残している。これは、着想メモと言えるもので、生前公刊されることはなく、手書きの原稿として、パリの国立図書館草稿部に保管されていた。ヴァレリー研究の第一人者であるミシェル・ジャルティは1987年にこの手稿を翻刻し、論集『なぜ、ヴァレリーか？』*Valéry, pourquoi ?*に掲載していたが、2017年に*Sur Nietzsche*として、上記の書簡と手稿等をまとめ、序文と注を付して公刊した。

本稿では、このジャルティ編集によるヴァレリーのニーチェ論集を一つの最重要コーパスとし、『カイエ』におけるニーチェについての記述の意味も参照し

ながら、ヴァレリーがニーチェの「奇妙な読者」であり続けたことの意味を考えてみたい。

1. ヴァレリーとニーチェの出会い

ヴァレリーはフランスの同時代のインテリたちと同様に、1900年頃、仏訳を介してニーチェを読むようになった。フランスにおけるニーチェの受容は比較的遅く、雑誌『メルキュール・ド・フランス』に1880年代の後半からニーチェの断片が掲載され始めるようになっていた。ニーチェの著作を単行本として訳出していったのはアンリ・アルベールで、1898年から1909年にかけてニーチェの主要な著作の仏訳が出揃っていった。

とはいえ、仏訳が揃うよりも前に、ニーチェの影響はヴァレリーに及んでいた。アルザス出身で優秀なゲルマニストでもあるアンリ・アルベールは、『メルキュール・ド・フランス』に「ドイツ書簡」のコラムを持っており、ニーチェ作品への興味を培っていた。アルベールはヴァレリーのわずか3歳年上であり、ヴァレリーがモンペリエからパリに通い出した初期の頃（1892年頃）から、火曜日には、『メルキュール・ド・フランス』編集長アルフレッド・ヴァレットの妻のラチルドが主催する午後のサロンに共に出席する（夕方からは、マラルメの「火曜会」に出席する）仲であった。アルベールは後に、雑誌『サントール』の編集長をつとめることとなり、ヴァレリーはこの雑誌に詩「夏」*Été*と「眺め」*Vue*、ついでヴァレリーには珍しい小説仕立ての掌編である「テスト氏との一夜」*La soirée avec Monsieur Teste*を寄稿した。そうした流れの中で、ニーチェについての研究をしてみてもどうか、との提案がアルベールからヴァレリーになされたようである¹。驚くべきことに1896年の『サントール』第2号の次号告知欄には《P.V. : Poe, Nietzsche》との記述が見られる。P.V.とはポール・ヴァレリーのイニシャルである。ヴァレリーによるポーとニーチェに関する論考掲載の予告と受け取れるのである。当時『ユーレカ』の宇宙論とも言うべきものに心酔しヴァレリーが共感と感嘆を寄せていたエドガー・アラン・ポーの名が論考のテーマに挙がっているのは驚くに当たらないが、ニーチェの仏訳などまだほとんど出ていない時点で、ニーチェの名が出ているのは唐突に感じられる。

¹ ヴァレリーの友人であったアンドレ・ジッドも「ニーチェの影響は、作品の発表よりも早かった」と述懐しているH.Albert, « Friedrich Nietzsche », *Mercur de France* n° 37, janvier 1893, p.47. 及び Gide, « Lettre à Angèle », *L'Ermitage*, janvier 1899. 以下に再録, *Prétextes* 1903, *Mercur de France*, 1963, p.81.

アルベールは、『サントール』へのヴァレリーの寄稿によりその力量を知り、日頃から言葉を交わす中で才気ありと見込んだヴァレリーに、ニーチェについて語って聞かせ、何かを書かせようとしたのだろうか。前年には、文献渉猟や伝記的事実の集積とは無縁に、一個の天才の内面の劇をミメシス的に再構成し、異様な文体的迫力に満ちた「レオナルド・ダ・ヴィンチ方法序説」をヴァレリーは『N.R.F』誌に発表していたので、その想像と文体の力にアルベールは期待を寄せたのだったであろうか²。

しかし、このヴァレリーによる「ポー・ニーチェ論」は掲載されることはなかった。そもそも『サントール』誌は資金的な問題から休刊に追い込まれてしまったのである。ヴァレリーがニーチェ論について、具体的に準備したと取れる文献的な記録も残されていない。

2. ニーチェの訳者アンリ・アルベールへの謝辞

雑誌『サントール』にヴァレリーのニーチェ論をポー論と共に掲載するというアルベールの企画は頓挫したが、アルベールは着々とニーチェの著作の仏訳を遂行し、ヴァレリーに訳書を送った。ヴァレリーは1900年の5月に結婚し、その前後からラチルド夫人のサロンから足が遠のいており、アルベールへの訳書恵贈への返信も1901年になってからようやく書かれた。ヴァレリーはアルベールのニーチェ訳の恵贈に対し、四通の手紙を書いている。そして、この手紙は、アルベールの死後、1927年になって、ヴァレリー自身の短い序文とともに『カイエ・ド・ラ・カンゼヌ』*Cahiers de la quinzaine*に掲載されている。序文でヴァレリーは、アルベールの「ツァラトゥストラの詩人哲学者の思想をフランスの人々に知らしめるという功績の大きな、著しい業績」³に敬意を評して手紙を掲載する旨を述べている。

とはいえ、ヴァレリーのアルベールへの謝辞は、翻訳者の労を労わりつつも、社交辞令に終始してはいない。言葉の端々にニーチェへの違和感も表明するも

² ヴァレリーが「レオナルド・ダヴィンチ方法序説」を『N.R.F』誌に掲載することになったのも、彼が友人との談話の中で、ダヴィンチについて熱心に語っていたことが発端となっている。ダヴィンチについて熱弁を振るう、まだ無名であった青年ヴァレリーを『N.R.F』誌を主宰するアダン夫人に紹介したのであった。1892年のいわゆる「ジェノヴァの危機」以後、ヴァレリーは「文学」や「詩」といった曖昧なものとの決別を決断するが、テキストとしては発表せずとも、ヴァレリーの知性の働きは会話の中に発揮され、しばしば人を魅了する面があったと思われる。

³ Paul Valéry, *Sur Nietzsche*, Edition établie, présentée et annotée par Michel Jarrety, 2017, La Coopérative, p.26.

のとなっている。ヴァレリーのアルベールへの謝辞から、ニーチェ評を読み取って見よう。

貪るように私は、『曙光』の断章を読みました。ニーチェを読む時のあの有益なる嫌悪感と共に。そして、翻訳者に対する、繰り返される感謝の思いもそれに混じりました。

ヴァレリーは、しばしば撞着語法を使う書き手であるが、「ニーチェを読む時のあの有益なる嫌悪感」*« tous les mauvais sentiments utiles quand on lit du Nietzsche »*もその一つである。フランス語の *« mauvais sentiments »* を仮に「嫌悪感」と訳したが、「悪感情」とも「不快感」とも「邪険な気持ち」とも訳すことができるだろう。「ニーチェを読む時の」とする際に、主語として一般的な「人」を指す「on」が使用されているところから、嫌悪感を持つのは、自分だけのことではなく、多くの読者にとって、少なくとも訳者であるアルベールも同じであろう、という含みも感じられる。嫌悪感を催すにもかかわらず、有益であり、貪るように読んでしまう。そのような力を持ったテキスト。実に奇妙なテキストである。『曙光』をヴァレリーはそのように受け止めている。またこの手紙の中で、ヴァレリーはニーチェを評して「一人の天才、それも最も疲れさせる、最もどぎつい天才」*« un génie le plus fatigant, le plus strident »*と述べている。そのような著者と格闘して翻訳を成し遂げたことにヴァレリーは賛辞を呈しているのである。「ニーチェを読む際の嫌悪感」は、したがって、アルベールへの賛辞を汚すものではなく、アルベールの訳業へのひねくれた労いになっているともいえる。

アルベールへの礼状の日付は11月11日となっているが、その1ヶ月ほど前、ヴァレリーはモンペリエの中学時代からの友人であるアンドレ・フォンテナスに宛て次のように述べている。

この間出たニーチェの翻訳⁴を一挙に読んだが、ひどく苛ついた。堪え難く、嘔然とするようなじりじりが延々と続くん⁵だ。

⁴ アンリ・アルベールは『悦ばしき知識』の翻訳 (*Le Gai Savoir*) を上梓したばかりだった。

⁵ *Correspondances Fontainas - Valéry*, éd. Anna Lo Giudice, Ed., du Félin, 2002, p.159.

この手紙にも、ニーチェの著作への嫌悪が示されているが、「一挙に (au galop) 読んだ」という表現が印象的である。フランス語の熟語にある通り、ギャロップで、つまり非常に高速に、読了したという訳である。ニーチェの著作を高速に読み進めるとは、著者とのある共通の了解の地平のようなものがなければあり得ない事態なのではないだろうか。

アルベールのニーチェ訳への二通目の礼状は、翌年、1902年に認められている。『人間的な、あまりに人間的な』第二部「漂泊者とその影」「様々な意見と箴言」*Humain, trop humain : Le voyageur et son ombre. Opinions et sentences mêlées*の仏語訳がアルベールから送られた直後のことである。翻訳の労をねぎらう挨拶の言葉が後半には付されているが、それに先立つ部分を以下に訳出しておこう。

何という漂泊者か、そして何という影がつきまとっていることか！このニーチェはスキュンダルです。これは人間の力の驚くべき発露であり、その力は、確かに驚くべきものです。

それにしても、弱き者たちは、ただ読み終えて、どんなにか自分を強き者と思うことでしょうか！

しかしながら、各人が自問自答し、内面の常軌を逸したものに触れるなら—その時、ニーチェは正当化されるのです。ニーチェは支配力を及ぼします—我々の間だけのことにしても…

フランス—と言っても往時のフランスですが、フランスに好奇心を寄せ、ほとんど貪欲なまでであった何者かを、今日のフランスに持ち来らすという途方もない奸計は、あなたに帰するのです。読んでみると、もはや的外れであるニーチェの賛辞のいくばくかに、赤面しかねません。⁶

この書簡における感嘆符は、ニーチェの著作の持つ訴求力へのヴァレリーの素直な反応と見て良いだろうが、ニーチェにかぶれて、弱き者が自分を強きものと錯覚してしまう危険もヴァレリーは察知している。また、「今でもなお、フランスはヨーロッパ文明の最も精神的で洗練された場であり、趣味というものの偉大な学び舎であるのです」⁷との『善悪の彼岸』における言葉や、「私はフラ

⁶ Paul Valéry, *Op.cit.*, *Sur Nietzsche*, p.31.

⁷ *Par-delà le bien et le mal*, OE.II 701.

ンス文化しか信じない」⁸との『この人を見よ』の言葉に見られるように、ニーチェはフランスに高い評価を与えている。ヴァレリーは、ニーチェの描いていたフランス像は、過去のものであるとの痛切な認識を持っていた。ニーチェの愛した往時のフランスと、自分の生きるフランスとの距離を、アルベールの仏訳は露わにしてしまう。それゆえ、ヴァレリーはアルベールの訳業を「途方もない奸計」と称したのである。ニーチェがフランスへの愛を込めて数々の著作を執筆していた時代から、このヴァレリーの書簡までは、たかだか二十数年ほどしか経過していないのだが、自国の文化の変容を、ヴァレリーは歳月に比して重いものとして捉えていることが窺われる。

アルベール・ニーチェ訳への三通目の礼状は1903年に書かれている。アルベールが『権力への意志』二巻及び『善悪の彼岸』を恵贈した際の書簡である。に対する謝辞として書かれたものである。

貴兄がお送りくださった、完成度は劣るが重要性においては勝る—総括的省察に値いするご高訳を、読み得る限りで読んでみました。

とはいえ、今はあまり落ち着いておらず、これら無数の着想に関して、考量したり、瞑想的なささやかな灯火を灯してみるだけのまとまった閑暇もありません。⁹

このように記しつつも、ヴァレリーは、ニーチェの「永遠回帰」の概念や「清潔さの要請」「書くということのモラル」といった問題に言及し、ニーチェが想定している「キリスト者」とは一面的でしかないのではないか、との疑問も呈している。さらに、ニーチェがエネルギー保存の法則を自らの理論に適用するやり方も拙速であること、同時代の学問の成果を必ずしも咀嚼しきれていないことまで、短い書簡の中で指摘している。翻訳を丁寧に読む時間はなく、細かな感想を書くことができないと釈明しつつも、これだけの問題を指摘し、さらに書簡の末尾近くには、「私は、どこか別の場所にいます。永遠回帰に参入します！」¹⁰とニーチェのミメシスを軽やかにやってのけている。実に凝縮された手紙である。

アルベールのニーチェ訳への最後の礼状が書かれたのは、1907年のことであ

⁸ *Ecce homo, OE.II.1134.*

⁹ *Op.cit., Paul Valéry, Sur Nietzsche, pp.29-30.*

¹⁰ *Op.cit., Paul Valéry, Sur Nietzsche, p.31.*

る。『反時代的考察』の第1巻と第2巻の翻訳に関するものである。ヴァレリーは、ニーチェの作品で、これほどゲルマン的なものが書かれたことはなかった、との印象をまず記している。そして、皆にとって、ゲルマンの人々にとって、ヨーロッパ中央の雲行きが謎に満ちている1907年時点での情勢について言及するとともに、前世紀末を生きたニーチェが自国ドイツの現実をしかと感じつつも、その未来については何も語らなかったのだとの感想を記している。アルベールへの書簡を結ぶ言葉が何とも洒脱である。

結局、何かの星座早見盤を見たり、統計書をめくったりするので、おそらく十分だ…¹¹

つまり、難解な思想家の文章に未来を語るものを見出すことはできず、予見不可能な未来を生きる人間が頼りにできるものといえば、自然の法則と、数で現れる客観性のみである、と暗に語っているのである。このことは、視点を変えてみるならば、ニーチェの著作に未来を見通す何らかの力をヴァレリーが無意識のうちに期待していたことをも物語っているのではないだろうか。

以上、1901年、1902年、1903年、1907年にそれぞれ書かれたニーチェの仏訳者アルベールへのヴァレリーの礼状を、順に検討してきた。ヴァレリーはこの4通を集め、1927年に『カイエ・ド・ラ・カンゼーヌ』誌に掲載した際に寄せた注記の中で、次のように述べている。以下に訳出する。

私の手紙に関しては、大したものではありません。お礼の言葉、読書の印象をわずかにさらっと辿って見せた言葉だけです。ニーチェの論理について、当時私がどう考えていたかほんのわずかしか思い出せないのですが、とは言っても、他人の書いた手紙のようにしてこれらの書簡を再読してみると、そこに自分の姿を見出すように感じます。ニーチェは、精神の闘争性、そして「反応」の素早さの陶酔的快樂を私に焼き付けてくれました。そうした快樂を私は常に少しばかり味わい過ぎていたのですが。また、私は、ニーチェの意識や予見される関係性の過剰による知的な眩暈、「限界」へと至る行文、それなしでは、思考がただ逃れ去るばかりとなってしまう

¹¹ *Ibid.*, p.32.

ような障害や課題を次々と生み出していく卓越した意欲が気に入っていました。ニーチェの著述の中には、なんとも言えない叙情と分析の緊密な調和があり、それはまだ誰も自在に成し遂げたことがなかったものでもありました。結局のところ、音楽によって培われたニーチェのイデオロギーの戯れの中には、元来学究的な概念や知見の稀に見る幸運な融合とその活用があり、それを私は高く評価したのです。ニーチェは文献学と生理学の両者によって武装したかのようで、その心的メカニズムに誠によく適応し、連関づけられていました。

しかし、別の部分で、ニーチェは私に衝撃を与えました。私の厳密への志向を煽ったのです。この猛々しく広漠とした精神は、制御不可能なもの で終わらないとは受け止められませんでした。¹²

アルベールへの礼状を認めてから20年以上の時を経て、ヴァレリーは自らの認めた手紙を「他人のもののように」再読し、今一度、ニーチェについての総括を行っている。以上の文章は、ヴァレリーの生前に公表されたものの中では、もっともまとまったニーチェについて文章である。ヴァレリーは1917年の長編詩『若きパーク』 *La Jeune Parque* が例外的な成功を収めて文壇の寵児となり、1925年にはアカデミー・フランセーズ会員に選出されており、第三共和制フランスの一種の欽定詩人の役割を果たしつつあった。昔の書簡を紹介するための序文と言う位置付けの小文とはいえ、見事にニーチェの魅惑と違和感とが集約されている。しかし、注意すべきなのは、ヴァレリーがニーチェの評価を全て過去時制（半過去）で語っていることである。アルベールに手紙を書いていた当時の自分の考察の再現という姿勢を崩さずニーチェ評は書かれている。この序文の末尾近くでヴァレリーは、『反時代的考察』の作者は、現代をどう考えるであろうか、自問することができよう。¹³と書くのだが、それを自らで展開することはない。それは、重すぎる課題であるとヴァレリーは悟っていたのであろう。

3. ギ・ド・ポンタレス著『イタリアにおけるニーチェ』を巡って

アルベール宛ての礼状4通がヴァレリーの序文とともに『カイエ・ド・ラ・

¹² *Ibid.*, p.26.

¹³ *Ibid.*, p.26.

カンゼーヌ・リテレール』に掲載されたことで、ヴァレリーと一人の作家との間に縁が生じる。ユグノーの家系に属し、ベルリンで生まれ、スイスとドイツで教育を受け、フランスで活躍し、ローザンヌで亡くなったコスモポリタンの作家のギ・ド・ポンタレス Guy de Pontalès (1881-1941) である。ポンタレスは音楽に造詣が深く、音楽家の評伝も多く残している。ポンタレスは、そうした流れの中で、『イタリアにおけるニーチェ』を1929年に上梓する。ポンタレスは、この本の冒頭に、ヴァレリーに宛てた長い献辞を載せている。以下に訳出しよう。

ヴァレリーに

親愛なるヴァレリーよ、あなたがその計り知れぬ偉大さと眩暈を覚えている一人の人間についてのこの不完全な小エッセイを、あなたに捧げさせていただきます。ジェノヴァについて話すという先般の出会いの偶然がなければ¹⁴、あなたの名前をこの本の冒頭に掲げようなどとは、おそらく思いもしなかったでしょう。ジェノヴァは、ニーチェと同様にあなたの愛した街です。そこで、あなたはニーチェと同様に、二十歳ごろ精神的な苦闘にまみれ、その後、あまりに若い栄光を摘み取ることを放棄するに至るのですが、その頃ニーチェは反対に自らの栄光をひとときたりとも掴み損ねまいと決意していました。あなたは賢明にも時を待ち、ニーチェは急ぎましたが間違っではおりませんでした。ニーチェが初めてジェノヴァで冬を過ごしてから10年経つか経たないかで、トリノでの悲しい12月¹⁵が巡ってきたのでした。

あなたは「この猛々しく広漠とした精神は、制御不可能なもので終わらないとは受け止められませんでした」と書かれていませんか？ 親愛なるヴァレリーよ、我々もまた、終わりはしません。と言うのも精神の作品において愛と憎しみが代わる代わる創造に加わるや否や、制御不可能なものが広がり、我々の悟性の中心を占めるのですから。それに愛や憎しみの堅固さを犠牲にしてのことにしても、おそらくはその動きや偏りに何か

¹⁴ 1927年5月、ヴァレリーとポンタレスは、ロシュフーコー伯爵夫人の家で出会い、ヴァレリーの母方の故郷であり、ニーチェの滞在した街でもあるジェノヴァについて語り合っていた。

¹⁵ ニーチェが発狂にいたる場所と時節。

を付け加えずにはいないのではないのでしょうか。愛と憎しみは傷つきやすいものとなり、同時に生き生きとしたものになるのです。

私は、このような情熱的な視点により、私なりのニーチェを探索しました。ひょっとすると、あなたがニーチェにアプローチする際に推奨されている「有益なる嫌悪感」に私は屈服するばかりとなっているかもしれません。そうならしていましたらお許しください。この本の一連のイメージはただ、思考の王子のうちにある、不条理だが粘り強い心の論理をただ描き出さんとするものです。¹⁶

この序文からは、ポンタレスがヴァレリーの短いニーチェ評から多くを汲み取り、ニーチェとヴァレリーを繋ぐ地であるジェノヴァを自らの著作のテーマのエンブレムとして重ねるようにしているのが見受けられるだろう。

ヴァレリーは、ポンタレスに丁寧な礼状を書くが、その中に、興味深い部分があるので、以下に訳出しておこう。

私は、ニーチェを初めて読んだ頃の印象をよく思い出します。アルベールは当時、渾身の力で『ツアラトウストラ』を訳していました。またアルベールは雑誌『サントール』の編集も務めていて、私はその雑誌に「テスト氏との一夜」を大急ぎで書いておりました。ツアラトウストラとテスト氏は容易には繋がりません。ツアラトウストラは究極の詩人です。テスト氏は全詩人の対極です。全てを飲み込んでしまう存在—何も弾き返すことのないブラックホールなのです。

偶然にも同時期に進行していたニーチェの『ツアラトウストラかく語りき』の仏訳と「テスト氏との一夜」の執筆。ヴァレリーはその事態を捉えて、ツアラトウストラと「テスト氏」を対置して見せている。「テスト氏」は「ある任意の」という印象を与える、リシェの人骨標本と黒板とベッドだけが置かれた抽象的なアパルトマンの一室に住み、株式取引を生業とし「お金は世の中の精神のようなものだよ」と嘯き、世のあらゆる権威や慣習を軽視している偶像破壊者として描かれている。後にシュールレアリスムの法王となる青年アンドレ・

¹⁶ *Ibid.*, pp.34-35.

ブルトンをも震撼・感激せしめた斬新な人間像だった。それをヴァレリーはツアラトストラの対極であるとの思い切った俯瞰図で捉えて見せている。ヴァレリーは、ポンタレスへの礼状に、続けて以下の通り記している。

しかし、何と言われようとも、私はテスト氏ではありませんでしたし、今もそうではありません。一朝、日が昇る前でなければですが…¹⁷実は私のはついにニーチェを愛するに至ったのです。翻訳により、翻訳を通じ、いや翻訳にもかかわらず。つまりニーチェを愛するというのは、ニーチェの偏愛するテーゼをではなく、また、その動きのいくつかを愛する訳でもありません。

私にとって見れば、ニーチェはある種の方法、ほとんど一つの論理と言って良いものを見出したのです。中心的感受性のあり方の知的な活用を論理と呼ぶとしてですが。—というのも、ニーチェの発する数々の概念やそれによって惹起される関係性の独特の範疇—そしてそれらの持つ一種の魅力はニーチェの知性の「神経的」形式に根ざすのです。ニーチェの形而上学と非倫理的倫理はあまり私にはピンと来ません。そうしたものは、別の形にすることもできるようなものに過ぎません。そうしたことは様々な思想を伝えるニーチェから伝わってくる反響の力ほど精神を鼓舞するものではなく、その反響力とは必ずしも思想内容に属するものではないのです。しかし、そのような力によってニーチェは、「思考する」あらゆる作家たちに、一世紀来立ちはだかつてきた、偉大なる音楽の存在感という難題を見事に解決してしまったのでした。私はニーチェの著作を『悲愴』や『熱情』¹⁸の切迫した実在感と繋がるかのようにして読みました。¹⁹

ジェノヴァについては…この素晴らしい街には不思議な力があります。私は幼いころ、そこで素晴らしい夏を過ごしました。92年にはそこで発狂するかと思いました。寝ずに過ごしたある夜のこと—実際雷の閃光で夜は白く、私は、雷に打たれてしまいたいと思いながらじっと過ごしてしまし

¹⁷ 「朝、日が昇る前でなければ」との留保が付いているのは、この時間帯はヴァレリーが『カイエ』の執筆に充てている時間であって、幾分か「テスト氏」のようであるという自覚があるせいであろう。

¹⁸ ベートーヴェンのピアノ・ソナタ『悲愴』(Op.13)と『熱情』(Op.57)を指すものと思われる。

¹⁹ *Op.cit., Sur Nietzsche*, p.36.

た（どうやら私は雷に打たれるにも値いしなかったようです）。ただ、空中に高周波あるように私の脳内に高周波がありました。私が生まれてから持っていたあらゆる思いや「偶像」を解体することが課題だったのです。欲することがなし得ることも、なし得ることを望まないことも知らないでいた自己とおさらばするということだったのです。²⁰

このようにヴァレリーは、ジェノヴァの地からも遠からぬトリノの地で発狂し、世紀の変わり目を前に逝去したニーチェを描いたポンタレスに応え、「ジェノヴァの危機」と称されることになる自らの精神的危機について触れている。モンペリエの街角で見初めた貴婦人への一方通行の不毛で不器用な思い、ランボーやマラルメ、ワグナーの天才を前に募る己れの無力への思い、一時滞在中であったジェノヴァの街を襲った嵐と雷鳴。そうしたものの全てが重なった時、ヴァレリーは自己断罪の思いにかられ、一切の「曖昧なるもの」—それは、詩であり、文学であり、恋でもあった—との訣別を決断するに至るのである。ヴァレリーは、ニーチェと同じく、美と精神的な危機²¹との両者の深い経験をイタリアの地から与えられている。

ヴァレリーがニーチェの思考の個々の主題にさほどの重要性を認めないと言いながら、ニーチェ著作に共鳴の強い力を感じ取っていたのは、ニーチェの文体の力もさることながら、共通する土地の経験、土地の気圏による結びつきをヴァレリーが感じ取っていたことも一因だったのではないだろうか。

4. 未完の手稿「ニーチェについての覚書」

以上に、ニーチェの翻訳者アンリ・アルベール及び、『イタリアのニーチェ』の著者であるギ・ド・ポンタレスへのヴァレリーの礼状を中心として、ヴァレリーのニーチェ観を検討してきた。無論、礼状には社交辞令的な部分は免れず、訳者や著者に対するむき出しの批判は文面上に表われることはない。ニーチェの読者としてのヴァレリーの姿をつぶさに見るべく、本節では、ヴァレリーの残した未完の手記である「ニーチェについての覚書」« Notes sur Nietzsche »を検討したい。

²⁰ *Ibid.*, *Sur Nietzsche*, pp.36-37.

²¹ 1892年10月のジェノヴァの危機の際、ヴァレリーの脳裏をよぎったのは、1889年1月、トリノの地にて、主人に鞭打たれた馬に泣きすがったニーチェではなかったかと、ヴァレリーの浩瀚な評伝の著者であるジャルティは推測している。Michel Jarrety, *Paul Valéry*, Harmattan, 2008, p116.

「ニーチェについての覚書」は1908年から1909年にかけて執筆された。1896年の『サントール』誌にヴァレリーによるニーチェ論の予告が掲載されたものの、同誌の廃刊によって執筆は実現しなかったのだが、10年経ってもそのことを覚えていたのがヴァレリーの友人であるアンドレ・ジッドであった。ジッドは『メルキュール・ド・フランス』誌上に掲載された抄訳によりニーチェに興味を寄せ、早くも1899年『エルミタージュ』誌に「アンジェルへの手紙」« Lettre à Angèle »と題したニーチェ論を発表している。ジッドは、ニーチェに対する熱烈な賞賛の言葉を連ねていた。

なるほど、ニーチェは破壊する。彼は覆す。しかしそれは意気沮喪してそうするのではなく、狂暴にそうするのである。高貴に、輝かしく、超人的に、あたかも新しい征服者が古き者を破るがごとくに、そうするのである。そこに注ぐ熱狂を、彼はまた他人の建設のために与える。(中略) 彼が生命のないものや陰鬱なものを破壊するときほど生命に燃えることはない。その時、どのページにも創造的精力が充満している。混沌とした新しさがそこに蠢いている。ニーチェは予見し、預言し、呼びかける。—そして笑う— (中略) ニーチェは破壊すると？ しっかりしてくれたまえ！ ニーチェは建設するのだ。—建設するというのだ。彼は腕の限りに建設するのだ。²²

このようにニーチェに対する手放しの賞賛を重ねるジッドの文章を『エルミタージュ』誌で読んだヴァレリーは、相当に手厳しい感想を綴った手紙をジッドに送っている。1899年1月13日付けの手紙から引こう。ヴァレリーの批判は緻密かつ詳細にわたるため、長い引用となる。

ところでニーチェに関しては…とんでもないことだ！ 君は性急に、いささか彼と一体化しすぎていると思う（と考えているが、まだ確然とではない）。僕にとっては、ニーチェはまず矛盾そのものだ。例えば彼はBという方法でAをこき下ろす。そうして、その後でBを廃棄する。こうして二つのこき下ろしを保つのだ。だからニーチェの中には感嘆すべきもの、素朴なもの、無駄なものなど一切合財がある。適切なものを選ばなければならないのだ。つまりスタンダールやデカルトへ戻ってみななければならない。

²² André Gide, *Prétextes*, Mercure de France, 1903, p.88.

(中略) 僕の見るところニーチェの大きな誤ちは、暴力を哲学に作り上げようとしたことだ。(中略) ニーチェの中で最も面白いのはあの断固たる威風、倫理的執心だ。(中略) —これが僕をいつも笑わせる。—というの、要するにこれは台所仕事なのだ。ニーチェは道徳の中で働こうとする。道徳の現代的基礎が見かけの良い無関心だということに気がついていない。それに「超人」が作り出す見事なトリックに気がついたのか？超人はオプティミズムとペシミズムを両方とも同時に可能にする。だからいくらでも違ったページが書ける。ロマン的でしかも同時に古典的になれる等々。主人と奴隷との道徳には興味が湧いた。だが、なんという言葉遊びだろう！

しかし今ではニーチェを充分に赦せる。なぜなら、彼もまた「さらにもう一層多くの意識を」という僕の古い偶像の味方だからだ。だが、あの道徳とか偏執みたいなもの、そうしたもののお陰で僕は逆に、ひたすら思考の形式の追求に没頭できる。(中略) だからニーチェは「直接的には大したことを教えない」のだ。期待されたニーチェの斬新さも、僕の目には個別のものの豊かさと多重性が、単純な一般性と結合しているだけのものに映る。しかし暗示に富む著述家だ。なぜなら、たったの1ページに、夥しい異質なものが詰め込まれているのだから。²³

ジッドとヴァレリーは、ピエール・ルイスを仲立ちとして知り合った。ジッドはヴァレリーより3歳年上であり、文学的なデビューも早く、生粋のパリジャンとして南仏出身の文学青年ヴァレリーを文壇に橋渡しした。事情通であり明らかにヴァレリーの先輩格ではあったが、彼らの中で頻りに交わされた書簡の中では、しばしばヴァレリーがジッドを圧倒している趣がある。ジッドの文体、その叙情的感受性の方が、はるかにポピュラリティを得やすかったのだが、ヴァレリーの伶俐な批判精神の前では、ジッドはその脆さを露呈することがしばしばであった。ジッドのニーチェ論も、ヴァレリーに組み伏されてしまっているのである。しかし、ジッドには、ポピュラリティとは無縁のヴァレリーの才能を認め、『カイエ』の執筆に没頭し自らの著述を世に問おうとしないヴァレリーにいつの日か光が当たるのを願う、公正で寛容な精神が宿っていた。手厳しいヴァレリーの批判が身に堪えていたはずのジッドは、それでも、と言うべきか、それゆえにこそ、と言うべきか、ヴァレリーに今度こそニーチェについ

²³ *Op.cit., Sur Nietzsche, pp.22-23.*

て書いてみないか、と持ちかけるのである。

ジッドの提案を受けヴァレリーは、アルベールから10年近くにわたって送られてきたニーチェの訳書を、本腰を入れて再読することとし、1908年から1909年にかけてニーチェについての覚書を書き溜めていった。結局、ヴァレリーはニーチェ論を纏めることができなかつたのだが²⁴、29枚の紙片に残された言葉から、ヴァレリーのニーチェ観を伺い知ることができる。

5. 「ニーチェに関する覚書」の基調

内容が多岐にわたる覚書の詳細な分析については稿を改めなければならないが、ヴァレリーがなぜニーチェの奇妙な読者であり続けたのか、という観点から、この覚書を読み解いてみよう。

この覚書は、実際、メモと言って良い体裁のものであり、必ずしもリニアな文章の形を取っていない。ジャルティによる翻刻出版のページは、手書きのメモの文字の配置をも再現するものとなっている。筆者は、手書きのオリジナル原稿を直接確認していないが、ジャルティの翻刻をベースとして、以下の解釈を行うことを予め断っておく。

この覚書の大前提となっていると思われる言葉がある。それは「ニーチェは刺激剤だ。しかし糧ではない」²⁵との言葉である。訳者アルベール宛ての書簡においても、ヴァレリーはニーチェを読む際の「有益な嫌悪感」について言及していたが、自分の中に不穏なものを引き起こすもの、違和感や異物感を与えるのがニーチェのテキストだという前提があるように思われる。ニーチェを読むことは、ニーチェに同化することではなく、ニーチェと己れの差異を感受することにより、自らの輪郭を知るような経験としてヴァレリーには捉えられていたのではないだろうか。ヴァレリーはパスカルについても同様のことを述べている。「パスカルは刺激剤だ。だから19世紀には評価が高かったのだ。しかしパスカルは養分ではない」²⁶と。「刺激剤」とは、嫌悪や不快感を与えるのみならず、定義からして主体のポジティブな反応を引き出すものである。ヴァレリー

²⁴ ポンタレスは、ヴァレリーの語ったこととして、日記に次のように書き綴っている。「ニーチェは私が常々再読している唯一の近代哲学者です。ニーチェについて書く計画があったのですが、ニーチェのテキストを吟味するほどドイツ語の知識がないのと、アンリ・アルベールの翻訳は全く十分なものではないことから、断念するに至りました。」(Pontalès, *Journal II :1919-1941*, Gallimard, 1991, p.167.)

²⁵ *Op.cit.*, *Sur Nietzsche*, p.59.

²⁶ Paul Valéry, *Cahiers II*, p.1199.

の言う「刺激」とは、日頃は意識されていなかった問題の所在をつきつけられ、考察のトリガーが発動することを指すのであろう。

一方でヴァレリーは、「私はニーチェが言っていることを気にかけない。ニーチェが考えなければならないことに関心がある。」と覚書に記している²⁷。ニーチェが示すあれこれの概念やテーゼにさほどの関心はない、という意味のことも書簡に認めていたヴァレリーであるが、結局ヴァレリーは、ニーチェを読むと言っても、ニーチェ自身の思想に向かい合うと言うより、ニーチェの言葉の鏡に映すことによって、常に自分の問題に向き合おうとしていたのではないだろうか²⁸。

覚書の中には、ニーチェについての見事な、しかし実に手厳しいポルトレ（人物描写）も見られる。

ニーチェは卓越した人間であった。文献学の優等生。狂気に至ってなお静かな人柄。このおとなしい動物一栄光に飢える文士。

ボルジアのように考え、しかもリトレのような学究生活を送るとは、全く滑稽なことだ。—ここから無秩序が生まれる。²⁹

ヴァレリーは、ニーチェがもともとドイツの大学教師であったことを意識している。そうしたアカデミズムに守られた過去を持つことを一種の弱さとも見ている。ボルジア家のような血みどろの戦いのようなものとはそもそも無縁であり、19世紀に長年をかけて黙々とフランス語の辞書を完成させた学究であるリトレのような生活にむしろ近い生涯を送りながら、人間の獸的な闘争心や力への志向を言語表現にもたらずニーチェの物書きとしての不自然を鋭く指摘しているのである。ニーチェの言葉の無頼の影に隠れている、元学究の徒としての、人文学的伝統とやらの胞衣に守られているかのような脆弱さ。そうしたものでヴァレリーが透視しているのは、潔く一介のサラリーマンとなって妻子を養いつつ、世間的な見返りなど一顧だにせず、黙々と『カイエ』を記すことを中心とした日々の思索の数時間を確保し続ける経験あつてのことだろう。ニーチェの読者としてのヴァレリーが、ジッドのようにニーチェに感溺しないのは、

²⁷ *Op.cit., Sur Nietzsche*, p.67.

²⁸ ヴァレリーは「熱心に本を読むことは、解釈を続けることに過ぎず、内的な声を書いたノートの連続に過ぎないのではないか」と『マルジナリア』*Marginalia*に記している。

²⁹ *Op.cit., Sur Nietzsche*, p.55.

あまりにニーチェが「読者」というものを実体化しすぎ、言説の中で相手の逆をつくことの偶像視に陥っているように見えるからでもあったであろう。書き手としてのニーチェへの手厳しい批判を覚書からもうひとつ引用しよう。

ニーチェには、精神的なリアリズムの感覚が欠如している。彼は種別を混同し、一つのイマージュに対して逆上する。そして自分の思想を無際限に信じこんでいる。³⁰

上記の批判は、作家の気質に関わるものであって、容易に動かしがたい部分についてのものである。ヴァレリーの指摘はニーチェの欠点の指摘であるが、こうした気質から生まれる文章に人を揺り動かす力が宿るのもまた事実である。ジッドはそうして揺り動かされることに身を委ねるタイプの間人であり、ヴァレリーはその一種の扇動に不安と疑念を呈するタイプの間人であると言えるであろう。ヴァレリーは言葉を尽くすニーチェに対してさえ「厳密への意思が足りない」と喝破し、読者を道徳的に導こう、改善しようとするニーチェの姿勢に「倨傲」を見ている。ニーチェの著作が刺激剤であることを知りつつヴァレリーは、常に身構えつつニーチェを読むのである。そうしたことが、「ニーチェに関する覚書」から浮かび上がってくる。

6. 晩年の『カイエ』におけるニーチェ像

こうして、ヴァレリーは1908年から1909年にかけてニーチェに関する覚書を書き継いでいったのだが、ニーチェ論考執筆は進まない。1909年2月1日のジッド宛ての書簡に、うまくいかないので仕切り直して3月に始める、とヴァレリーは記すのだが³¹、結局それも反故になる。その後、ニーチェに関する記述は、『カイエ』に記されることになる。1920年頃、ヴァレリーは高名な医者の娘で、多くを独学で吸収しながら、鋭敏な知性と豊かな教養を身につけた人妻カトリーヌ・ポッジを知り、やがて二人は恋愛関係に陥るのだが、ポッジはニーチェを愛読しており、二人の会話において、ニーチェは共通のテーマであった。こうしてヴァレリーのニーチェへの興味は持続されていった。ポッジとの破局後もニーチェへの興味が消え去ることはなかった。第三共和制フランスの文化のコ

³⁰ *Ibid.*, p.61.

³¹ 当時、ヴァレリーの妻のジャンニーが体調不良で、ヴァレリーは看護に身をやつしていたという事情もあった。

メディアンのごとき役割を演じ、国境を超え講演のために旅行する時も、ニーチェの著作を携えることがあった³²。晩年に至っても、『カイエ』にはニーチェへの言及が頻出する。最晩年と言って良い1942年、ヴァレリーは『カイエ』に次のように記している。相変わらず、手厳しい批評である。

ニーチェ（彼はイデオロギーの分野で私の最も高く評価するものの一人だが）にある詐りのものは一彼が他者に付与する重要性—論争術、—及び様々な理論立てを思わせるもののすべてである。彼はすでに「文学史」中に席を与えられた物事をあまりに眼中に置きすぎる。—ソクラテスとカントを征服した「彼」が、だ。

それから魔術的な語の「生」、しかしこれに依存するのは安易というものだ。³³

ヴァレリーは、ニーチェと同じく、リヒャルト・ワグナーの音楽への愛とひとはけの嫌悪とを持つ人間だった。ヴァレリーは、歌劇『ローエングリン』序曲にニーチェが感得していたであろう神話としての「背後世界」を否定しようもないものとして実感していた。『ローエングリン』からほとぼしる純粹な熱情を若き日、モンペリエの劇場で受け止めたヴァレリーは、ワグナーの音楽を介してニーチェの心情に触れるような思いも持っていたことだろう。そうした言語を超えた情調的な基盤があつてこそ、書き手としてタイプが違うニーチェという作家の、刺激剤として働く、不快でもあるテキストを読むことを、ヴァレリーは晩年まで続けてしまったのではないだろうか。ニーチェという比類ない鏡が、自らを映し出してくれることに、ヴァレリーは気づいていたことであろう。

おわりに

本稿においては、ヴァレリーをニーチェの奇妙な読者として捉え、ヴァレリーがニーチェの読書から何を得たのかについて、書簡や覚書、『カイエ』の断章を参照しつつ論じてきた。前述した通り、ヴァレリーはニーチェについてのまとまった論考を公刊しなかったのだが、ヴァレリーが公刊した数々の作品の中に、

³² 1931年、ストックホルムからダーネマルクに行く列車の中で、ヴァレリーはアレクサンドル・ヴィアラットが翻訳したニーチェの『選集』を読み続けた。Op. cit, Michel Jarrety, Paul Valéry, p.785.

³³ Paul Valéry, *Cahiers I*, p.743.

ニーチェの影を探すことはできるだろう。ヴァレリー初期の「テスト氏」の人物造形が「ツアラトウストラ」の対極を意識してのものだったこともその一例であるが、たとえばヴァレリーの晩年の未完の対話篇である『我がファウスト』の中にも注意深く辿って行けば、ニーチェの著作との格闘の軌跡のようなものが見て取れるはずである。そのような分析については、「ニーチェに関する覚書」の詳細な検討とともに、今後の課題としたい。